

古典と現代

— 西洋人の見た日本文学 —

古典と現代

古典と現代

昭和四五年六月二〇日発行

定価九八〇円

編著者 武田勝彦

発行者 清水秋夫

印刷所 光明社

発行所

株式会社

清水弘文堂書房

東京都千代田区神田猿樂町二ノ四
小黒ビル電話(二九三)九七〇八

△落丁・乱丁本はお取替えします▽

序

川端康成氏のノーベル文学賞受賞によって、海外における日本文学への視圏は、このところいちじるしく拡大された。武田勝彦氏は、つとに海外における日本文学研究の動向に注目し、その啓蒙的紹介の作業を精力的にはたしてきた。武田氏の調査と研究は、上述の情勢によってさらに拍車をかけられ、最近の業績は瞠目に値するものがある。その作業は各国のすぐれた日本文学研究者の知己によって支えられ、博搜の結果と、卓抜な眼光とによって大きな収穫を生み出しつつある。

今後の日本文学の研究は、国の内外を問わず、閉鎖的で固殻化した既成の概念で律せられることなく、柔軟で新鮮な思考をもって多くの発掘がなされてゆくことになるであろう。その場合に、海外から見られた日本文学の実態が、どのようなものであるかということは、国内における日本文学の研究者に大きな刺激を与えることになる。

本書において武田氏が意図した編集方針の基本は、おそらくその点にこそ存するであろう。そして「総編」「古典」「現代」の三部構成から成り、総題として「古典と現代」を冠したその内

容は、まことに時宜を得たものと思われる。

日本の近代文学は最近とみに注目を惹き、海外でも同時代意識をもって享受の対象となりつつある。しかし『源氏物語』いらいの日本のすぐれた古典が、真摯で着実な研究対象として採りあげられ、卓越した凝視の成果が公にされてきていることを忘れてはならない。その凝視は、ある場合には巨視的に文学理論の全体系のなかに結実し、またある場合には微視的に実証の掘りさげの作業のなかに成果を生み出してきた。ゆえに、本書に盛られた内容が、そのような配慮からも選抜されていることには、高い価値を与えることができると思う。

本書に選択され、あるいはとくに本書のために海外から寄せられた力篇は、それぞれに豊饒な問題意識と、多大の示唆を提供している。武田氏の訳出も明晰で、筆触の清爽を感じさせられる。そして、本書を成立させるにいたった各国のすぐれた日本文学研究者が惜しみなくその造詣を顕示された至福を有難いことに思う。

このような企てに触発されて、国際的な協力のもとに、さらに新たな有意義な作業が展開されてゆくことを祈念してやまない。

一九七〇年五月

長谷川 泉

目次

序

長谷川 泉

第一編 総論

第一章 海外における日本文学研究の意義……………武田 勝彦 三

第二章 日本文学研究における西洋と日本の関係……………鶴田 欣也 七

学会展望

北米の日本文学教育の問題点

北米における近代日本文学研究

日本文献学の功罪

青い目に日本文学が解るか

日本人に日本文学が解るか

日本における文学研究の地味

双生児的言語障害の日本文化

外国人学者の役割

三七

第三章 アメリカにおける日本近代文学研究の動向……

バルドー・ヴィリエルモ

四二

第四章 日本の伝統的文学理論と西洋 ……………上田

真 全

文学作品と現実世界

作品と作者

六七

作品と読者

六九

作品の存在様式

一〇〇

作品の内部構造

一〇四

文学の効用

一一〇

第二編 古 典

第一章 わが『源氏物語』像 …………… E・G・サイデンスティッカー

二一九

第二章 日本文学における英雄像 …………… ウィリアム・R・ウイルソン

二二三

英雄文学概観

二二三

軍記ものの変遷	一三四
英雄像の分析	一三八
軍記ものの文章と吟唱の関係	一四一
英雄文学の意義	一四二
第三章 『徒然草』と美の伝統	一四七
時代と環境	一四九
『徒然草』の成立	一五〇
兼好と清少納言	一五一
美しさとはかなさと	一五四
教養——イタリア文学との対比	一五六
『徒然草』と現代	一六〇
第四章 俳諧の連歌の源流を辿って	一六三
日本詩歌の源流	一六四
連歌における連想	一六六
有心連歌と無心連歌	一七〇
貞門の勃興	一七七
談林派と西鶴	一八〇
ドナルド・キーン	一四七

西鶴自註独吟百韻初表解説

一八三

第五章 浮世草子の手法と文体……………ハワード・ヒベツト

一八九

特質と絵画的性

一六〇

分析の手法

一六四

パロディ化と文体

一六六

江戸文学におけるリアリズムの問題

二〇〇

アストンの其蹟批判

二〇三

西欧文学との対比

二〇四

西鶴と其蹟のパロディ

二〇六

諷刺とリアリズム

二〇九

リアリズムの挫折

二一〇

第三編 現代

第一章 透谷の意義……………フランシス・マシー

二四四

(a) 自我

二四三

(b) 神

二四三

(c) 恋愛

二四三

(d)	社会	三七
(e)	自然	三六
(f)	歴史	三九
(g)	道徳	三九
(h)	文学	三〇

第二章 『明暗』論……………バルドー・ヴェリエルモ

二四一

お延論

二四二

吉川夫人論

二五二

お秀論

二六三

小林論

二六五

清子論

二六九

第三章 『范の犯罪』論……………トーマス・E・スワン

二七三

第四章 芥川龍之介における阿呆と天才……………鶴田欣也

二八三

第五章 川端康成管見……………ジェイムズ・T・アラキ

二九三

第六章 生と美の肯定—『山の音』論—……………ハイメ・フェルナンデス

三〇五

第七章	『野火』について……………	アイヴァン・モリス	三七
第八章	遠藤周作の泥沼日本……………	フランシス・マシー	三九
あとがき			三六

第一編
總論

第一章 海外における日本文学研究の意義

武田勝彦

海外における日本文学研究については、昭和九年に刊行された沼沢龍雄の『日本文学史表覧』における精査な「外国語訳国文学年表」がある。これは基礎的資料として、最も秀れた労作であり、日本文学研究史上いかほど高い評価を下しても高過ぎるということはないものである。さらに、昭和十二年に刊行された久松潜一氏の『西歐に於ける日本文学』は斯学の先鞭を付けたものとして重要な作品である。

戦後、昭和三十九年に佐伯彰一氏が翻訳したエドワード・G・サイデンステッカー氏の『現代日本文家論』、昭和三十八年に吉田健一氏が翻訳したドナルド・キーン氏の『日本の文学』の両著は海外における日本文学の実態を如実に示したものとして見逃すことはできない。また、アー・マイナー氏の『西洋文学の日本発見』は深瀬基寛・村上至孝・大浦幸男氏によって昭和三十四年に翻訳されているが、これは、輸入過多に悩む日本文学に対して逆反応の臨床報告書として忘れ難い異色の作品である。また、毛色は異なるが昭和四十四年に佐伯彰一氏が書き下した『内と外からの日本文学』も貴重な文献である。

今後の日本文学研究者が世界文学の座において日本文学を再検討していかねばならないことは、これらの先覚者の業績の示すところである。それならば、日本文学を世界的視園において研究することにいかなる意義があるかを再考しておかなくてはならないと思う。稿者は、これに対

して次の四つの理由をあげたい。

一、歴史的発展段階の要求

二、世界的視圏に日本文学を置くことによって、自己確認を明確な形で行ない、日本文学の価値の再発見をすること

三、日本文学研究法への反省

四、比較文学確立への示唆

以下に、この四項目にわたって解説を試み、海外における日本文学研究を検討する意義を明らかにしたいと思う。

〈一、歴史的発展段階の要求〉

十九世紀から二十世紀に入るとつれて、人間は思春期の存在を発見し、その時期が人間形成に与える大きな意義に改めて驚異の目を見張ったのである。少なくとも、東洋においても、西洋においても、中世紀までは、子供と成人の中間地帯に思春期なり、青年期をおくことはなかった。子供は十二・三才で一挙に大人の世界に入ったのである。わが国における元服の儀式といい、西欧における子供と大人の服装といい、その歴史を如実に示している。しかし、社会が複雑になり、人間の平均寿命が延長されるにつれて、思春期は独立した時代となり、さらに、幼年期すら

出現し、現在では壮年期と老年期にもう一つの時期すら誕生しようとしているのである。この事実は人間の思考がますます細分化され、自我の探求が深層化した結果であると共に、社会的変革の余波によるものであることはいうまでもない。『山の音』の信吾の年令に光源氏が生き延びていたとしても、果して紫式部は、菊子に触発されて、保子の姉を夢見た信吾を描き得たであろうか。逆に、『女であること』の市子が『源氏物語』に登場するとしたら、光一に対してあのような感情を抱くように紫式部は構成し得たであろうか。これは人間の歴史をタテ糸を辿って考えたことであるが、ヨコ糸のほうはどうであろうか。十九世紀のヨーロッパの浪漫主義運動を考えると、両シュレーゲル兄弟やハイネの活動とルソーやユゴーあるいはゲーテの活動との間に見られた交流以上に、現在、日本文学と西欧文学との間には烈しい交流が見られるのである。しかし、その交流を現時点において区切ることは許されない。各国文学の深い歴史の堆積は各国の作家に圧倒的な影響を与えている。川端康成氏の文学に西欧的なかげりが皆無でないことは、『水晶幻想』や『抒情歌』などの若き日の作品によらずとも、戦後の『生命の樹』や『地』さらには『片腕』にまで西方の聖典の片言隻句が忍び込んでいることから明らかにしよう。川端文学を大河にたとえるならば、これらの要素は肉眼では識別できないほどの微々たるものであり、氏の文学を育み、支えているものは、日本の文学に他ならない。したがって、もし、西欧の日本文学